

【小説部門・優秀賞】

少女の季節

私立田園調布雙葉高等学校 第3学年 本領 里緒

1月の中頃、私は学校へ行った。梅の花が見たかったのだ。校門付近に植えられた梅は、毎年見事な咲きっぷりを見せてくれる。校内ではあまり話題に上がらないけれど、学校付近に桜を植える学校が大半を占める中、あえて梅を植えるそのセンスが、私は嫌いではなかった。

訪れて最初に花を確かめると、満開とはいかないまでも、結構な数の花が咲いていた。七分咲き、と言ったところだろうか。玄関へ続く道には、おもちゃのような小さい花卉が点々と落ちて、まだらになっていた。それを見て、花が全部落ちたらレッドカーペットになるかな、なんてバカな事を、少し思った。

その後は、迷わず高三の教室へ向かった。冬休み前、自分で持ち込んだ本を置き忘れたのだ。恐らく、机の中に入っているはずだけれど。なかったらどうしよう。あの続きが気になって、休みの間何にも集中できなかったのに。もう一度買いなおす可能性を考えて、私は頭が痛くなった。文庫本一冊、たかが六百円とはいえ、高校生には手痛い出費だ。どうかありますように、と祈りながら教室のドアを開ければ、そこには誰もいなかった。当たり前だ。受験真っ盛りのこの時期、学校を、さらに言えば自分の教室を訪れる人間なんて、そういるはずがない。自分の机に駆け寄り、そこに目当てのものがあることを確認して、私は息を吐いた。そのまま、椅子に腰をおろす。突然足が重くなったような気がして、私は目を閉じた。

十二月、進学する大学が決まった。指定校推薦だった。知らせを受けた時、あんなに嬉しかったのに、今は毎日が少し虚しい。それは、火が消えてしまったような静けさだった。木は残らず灰になり、残っているのは、鼻を突く煙臭さだけ。

「夕子？」

後ろから呼びかけられて、はっとした。

「こんな所で、何してるの」

振り返ると、セーラー服姿の上背の高い少女が、怪訝そうにこちらを見ている。

「小百合」

そう呼べば、彼女はちらりと私を見て、小さく笑った。

「勉強ってわけじゃなさそうね、そのぼんやり顔じゃ」

「ん、ちょっとぼうっとしてた」

「あたしは構わないけど、大概にしないと一般受験組に刺されるわよ。あの子たち、ただでさえ気が立ってんだから」

「やっぱり、休憩なんかしてちゃまずいかな」

「まずいわね。場所が教室って言うのが、さらにまずいわ」

「何よう、小百合だって、推薦組でしょ」

「あたしはやることがあったんだもの」

小百合は涼しい顔でそういなし、こっちに歩いてきた。私より数段高い位置にある腰が、机の隙間を器用に縫う。黒のプリーツスカートが、金魚の尾びれのようにひらめく。小百合はあつという間に私のそばへ来て、腰かけた。

「何、何するの。面白いこと？」

「そうとも言えるし、そうとも言えない」

小百合は鞆から何か取り出し、これ、と投げてよこした。紙の束が机に落ち、ぼさっと音を立てた。一瞬面食らったが、手に取ってから原稿用紙だ、と気づく。茶色いマス目のほとんどを、神経質な字が埋めていた。

「これ、小説？」

「そう。三日後までに書き上げなきゃいけないのに、終わらなくて」

「まだ書いてたんだ。凄いねえ」

「夕子だって、書けばいいじゃない。あんたも文芸部でしょ」

「私は無理だよ。読むのは好きだけど」

小百合はどこか残念そうに、そうかしら、と呟く。不満気だったけれど、そうだよ、と返せば、食い下がらずに手元へ目を落とした。

私に小説は書けない。短編ならともかく、長いものは決して書けない。何百枚もの原稿用紙を使い、睡眠時間や精神的余裕を犠牲にして当時の自分の意識を書き残すなんて、普通の人間にはできっこないし、それを出来てしまう小百合の精神が、私には信じられなかった。

想像しただけで、ため息が出る。一体、小説家というのはなんてとんでもない生き物なんだろう。これはある作家の著書を読んで知ったことだが、彼女たちはどうやら、小説を書くことが楽しくてたまらない、というわけではないらしい。むしろ、辛いのだという。苦しくて、虚しくて、叫びだしたいのだと。どうしてこんな職業に着いたんだろうと、物語を書いたたびに、苦しむのだという。それでもね、私たちは書かずにいられないんですよ。息を吸って吐くように、物語を作らなければ、苦しくて、心細くて、いつか狂って死んでしまう。作家は、自分の血で物語を書くのです。その著者は、自嘲するように、そう書いていたのだ。そうなんだろうな、と思う。可哀想だな、とも。私には、創作者の苦しみなんてわからない。ただ、多くの小説家が身を削って取り出したものを、咀嚼して飲み込むだけだ。

私のことなど忘れたように、小百合はペンを走らせる。シュルシュルとペン先の滑る音が響く。白く口を開いていたマス目が、細かな文字に埋め尽くされる。その迷いのなさに、私は思わず呟いた。

「モーツァルトみたいねえ」

小百合は目を上げて、怪訝な顔をした。ペンの音が、一瞬途切れる。

「何それ、どういう意味？」

「モーツァルトの曲には、下書きがないんだって。多分、頭の中で完成させてから楽譜に写してたんだろうね。でも、傍から見てると何もない所から音楽が生まれたように見えたんじゃないの」

「あたしもそう見えたってこと？」

「そう」

「音楽の天才と一緒にか。光栄ね。じゃ、夕子、あんたはどうなの」

「私？私はサリエリ」

あらやだ、ライバルじゃない。小百合が景気よく笑って、足を組み替える。いい足だな、と思った。全体もさることながら、膝から下が特に長い。骨っぽく感じる程華奢なのに痛々しさのない、女子なら一度は憧れるような細い足。

「小百合、今は何書いているの」

「高校生の女の子が、延々悩む話。折角歳が近いんだもの、リアリティを出したいわね。あらゆることを大げさに捉えて、直ぐに落ち込むような女の子を主人公にして」

「えーっ、それって、思いっきりテンプレートじゃない」

「テンプレートだからいいのよ。やりすぎたらいやらしいけど、上手くいけば名作になるわ。タイトルは、そうねえ、『青い果実』なんていかが」

やだあ、と顔をしかめれば、小百合は軽快に笑って、髪をかき上げた。カーテンが取り払われ、耳から顎にかけてのラインが剥き出しになる。それを素直に、綺麗だな、と思った。

小百合は美人だ。与えられたものの意味も知らずに、若い時を謳歌する私たちは、皆それぞれにうつくしいけれど、小百合のそれは飛びぬけている。白い額、小さな顎、光のよく入る大きな目、まつ毛は素晴らしいカーブを描いたまま、ピンと上を向いている。人の、特に少女の美しさを、「人形のような」と表現する作家を、私は信じない。この繊細な線を、痛い程張り詰めた佇まいを、どうして表さずにいられるのだろう。

「ねえ小百合、あれ知ってる？」

「何？」

「一個下の田辺さんが、西高の男子と付き合い始めたって噂」

「何それ、どこ情報？」

「学年ラインで友達がばらしたんだって」

「田辺さんって、バドミントン部の可愛い子でしょ。そりゃ、そういうこともあるわよ」

「そうかなあ。何か、ショックで。だって彼女、清純派で有名じゃない」

「やだ夕子、アイドルに夢見る青少年みたいなこと、言わないでよ」

「夢見てるかな」

「見てる、見てる。大体、あんたと彼女にどんな接点があった訳？」

「前、資料整理の仕事を手伝っただけ」

ありがとうございます、と微笑む田辺さんの、桃色の唇を思い出す。リップクリームの艶が残った、程よくピンク色の唇。あの唇が、今は知らない男の子とキスをしているなんて、とても信じられない。

「田辺さん、今、どういう気持ちなんだろ」

「どういうって？」

「だって今、少なくとも同級生全員が、彼女が付き合ってること知ってるんだよ。私だったら、恥ずかしいけどな」

「恥ずかしいだろうけど、それ以上に得意なんじゃない？彼氏持ちなんて、それだけでステータスでしょう」

「ステータス」

「ステータス。恥ずかしくなるのは、もっと先」

ああ、そうなんだろうな、と思う。彼女たちは、何も恐れない。恥ずかしくない。今誰が好きだとか、誰それと付き合っているとか、大人になってから周囲に知られたら、顔を真っ赤にして逃げ出したくなるような事柄でも、あっけらかんと喋って無邪気に笑う。何も、恥ずかしくなんかない。女の子でいることは魔法だし、可愛い女の子でいることはもっと魔法だから。だから、彼女たちは無敵でいられるのだ。いつの日か、その魔法がとけるまで。じゃあ、私は？私はまだ、女の子だろうか。少女だろうか。もしそうであるとして、大人になれば、また考えは変わるのだろうか。じゃあ私が考えていることの何パーセントが、年齢によるものなのだろう。

小百合の顔を見る。原稿用紙を見ているようで、その実自分の内側しか見つめていない顔。心を削り、すり減らして、それでも自分を表そうともがく、その横顔の厳かさ。

「小百合」

「うん」

「小説、完成しそう？」

「完成させるわよ」

彼女は、断固とした口調で言った。冷たい、とも、そっけない、とも取れる口調だった。そうしないなんて有り得ない、という、覚悟を持った物言い。何故か、ひどくぞっとした。そこに潜んだ情熱の重みが、恐ろしかった。

「小百合、どうしたの？」

「どうしたのって？」

「だって、ねえ、何か」

遺作でも、書いてるみたいよ。

言ってから、すぐさま後悔した。縁起でもない、という気持ちが半分。でも、それより何より、自分の出した例えの、その的確さが、恐かった。彼女の顔に宿る冷やかさと、

怒りにも似た熱量。それは確かに、死に瀕して尚何かを残さんとする人間に酷似している。

小百合はそれを聞いて、ようやくペンを止めた。そのまま、ふう、と息を吐く。そして、ゆっくりとこちらを見据えた。

「遺作、かあ。相変わらず良いとこ突くわね、夕子は。あたし、あんたのそういうところが好きよ」

「え、何、ほんとなの」

「でも、まさか夕子に気づかれるなんてね。あたし、そんなに余裕ないのかしら。ポーカークフェイスには自信があったんだけど」

「やだ、ちょっとやめてよ、私そんなつもりじゃ」

私が焦って腕を掴むと、小百合はきょとんとした顔をした。そして、やだ、とくすくす笑う。何も問題ありませんよ、というように、私の手の甲を撫でる。

「自殺なんかしないってば。不治の病でもないわ。ただ、そうねえ、遺作っていうのは言い得て妙ね」

「だから、縁起でもないってば」

「違うって。だけど、さっき言ったでしょ。あたし、こう見えても焦ってんの。少女の自分の、終わりが近いから」

今度は、私がきょとんとする番だった。そのまま、少女の自分、と呟く。少女小説では使い古された、陳腐な表現。それが、どうして今出てくるのだろうか。受験から解放されて、感傷にでも浸っているのだろうか。あの小百合が？ありえない、と私は断じた。小百合は、決してセンチメンタルな人間ではない。むしろ、リアリストと言っていいくらいだ。この年頃にありがちな、脆く儂く傷つきやすく、同時にそれを振りかざしているような少女とは、一線を画している。そんな彼女が、単にうら悲しさを表すためだけにそんなこと表現をしたとは、到底思えなかった。

二ヶ月よ、と小百合は宣言する。

「あと二ヶ月で、あたしたちはこの学校を出ていくのよ。この制服だって、着られなくなる。そうしたら、あたしたちはもう少女じゃないの」

「少女じゃないって、そんな大げさな」

私は笑おうとしたが、やめた。彼女の真剣な表情に、あまりに似つかわしくないと思ったからだ。

実際、小百合のいうことは間違いではない。大学に入れば、私達は変わる。制服を着なくなる。化粧をする。お酒を呑む。門限を破る。男の子と付き合う。そして、望むと望まざるとに関わらず、『女』になる事を求められる。そうなったら、私達はもう『少女』には戻れない。両親と先生の庇護下で、ぬくぬく守られている甘ったるい存在には、二度と。小百合は尚も呟く。

「沢山の人がいるわ。適当に勉強して、授業中にうたた寝して、友達と喋って、遊んで、笑って、そうやって短い時間を過ごして、自分が少女であることも気づけないまま腐って

いく人たちが、沢山。あたしは、そんな風にはならない」

だから書くの。少女のあたしを、一欠けらでも残すために。失ったものは、『女』になってからは気づけない。大人になったあたしたちは、あの頃は若かったねえ、なんて笑いながら、お茶でも飲んでるんでしょう。でも、その頃のあたしたちは、きつともう正気じゃない。失ったものから目を逸らすために、何百の言い訳を並べ立てて、それを懸命に信じてるだけ。だとすれば、あたしが正気でいられるのは、今しかないのよ。

彼女はそれだけ言い終えると、ぐっと目元に力を込めた。苦痛に耐える表情。理不尽に対する怒りを、どうにか抑え込んだ顔。きっと彼女は、何一つ納得していないんだろう。時間などというものが、自分の意志と関係なく、色々なものを引き剥がしていくことを、許してはいないのだ。彼女はしばらくそうしていたけれど、やがて乱暴に紙に向き直って、何かを書きだした。小百合の手が、物凄いスピードで動く。文字を組み上げてはばらし、原稿用紙に書きつけて、残していく。しんと冷えた、それでいて燃えるような小百合の目。彼女はただ、自分の内側だけを睨んでいた。少女である彼女の、意識を、思想を、感情を、もうすぐ滅びる全てを、奪わせまいとするように、写し取っていた。

窓の外を見れば、もう陽は傾きかけている。グラウンドから、運動部の掛け声が聞こえてくる。コオ、カア、と鳴いていたカラスが、羽根を広げて飛び去った。カラスが鳴くから、かーえろ。そんな童謡を思い出す。

卒業まで、あと二ヶ月。私たちはその後、何を得て、何を失うのだろうか。風が吹いたのか、校門の梅の木が、身を揺さ振った。何枚かの花卉が、下を通り過ぎる生徒たちにかぶさる。赤い花びらは、短い時を笑いながら駆け抜ける、うつくしい少女たちの上に、降り注ぐ。